依存〈エヴァ〉

ルーシィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
依存〈エヴァ〉

【Ｎコード】
Ｎ８４７０Ｌ

【作者名】
ルーシィ

【あらすじ】
人には言えない秘密を抱えた人間嫌いな主人公が色々な人たちと関わりを得て周りの人達とお互いに成長して行ったら良いなと思う

時が動く

僕は今，　夢を見ている。二年前のあの日の出来事を　　忘れたくて、忘れられない

記憶の夢を、

「アキラは私の何も見ていない、私の事を今まで一度もちゃんと見てくれた事あった？」

「見ていたさ、僕は　　の事なら何でも知ってる。」

「嘘、　　そんな事無い。だから私はアキラの傍に居られない」

「僕が　　の何を見ていなかったんだ。教えてくれ。」

は僕の目をじっと見つめて

「アキラは私の事を人形としか見ていない、私自身を見てくれなかった」

「僕は　　の事を人形だなんてそんな風に思ったことはないよ。それだけは本当だ。」

彼女は悲しそうな顔で

「わたしは貴方の人形じゃない。私はアキラの人形じゃない」

「私は貴方の着せ替え人形じゃない。私は　　ただの一人の

、人間の　　、それをどうして分かってくれないの」

僕は　　の言葉にパニックに陥ってる。俺は　　を人形だなんて一度も思ったことは無い、それどころか　　の事は誰よりも愛してると自負している。

僕の愛は　　にとっては、その様に感じていたなんて今の今まで気が付かなかったなんて「僕はなんて馬鹿なんだ」っと口から洩れた

僕の声が聞こえていないのか　　は僕に向かって

「私は人形じゃない、だからアキラは必要じゃない、それどころか邪魔な存在　私の前から消えて居なくなって」

その　　からの拒絶の言葉を受けた直後に夢から覚めた。

寝汗でびっしょりなパジャマを脱ぎバスルームに入る。体に残る傷跡，特に首に残る傷跡はあいつを守るためについた物で僕の誇りだと考えながら、

シャワーを頭から浴びながらさっき見た夢の事を考えていた。

「あれはもう終わったんだ。僕は何も悪くない、すべてあいつ等があんな事をしなければ、こんな事には成らなかったんだ。」

シャワーを浴びおえてリビングに戻ると昨日の夜にカップに入れたままのコーヒーを手に持ちリビングの椅子に座り一口飲んだ。

「まずっ、やっぱりインスタントじゃ、こんなもんか、姉様の入れてくれたコーヒーが懐かしいね。まったく」

とつい愚痴を言い全てを飲み干しテレビを何となく点けた。テレビの中は何かのコーナーなのだろう。女子アナが男子中学生3名に声をかけていた。

「そこの君達、ネルフのチルドレンの6人の中で誰のファンですか？」

と、ありきたりな質問をして一番近くに居た生徒にマイクを向けた。

「えっ、俺はセカンドのアスカさんかな。スポーツ万能で成績優秀であの美貌で誰にでも優しく接してくれるから好きですね。だから彼女が三人の中で一番ですよ」

右隣に居た生徒は

「違うだろ、やっぱり一番はファーストの綾波レイさんに決まっているだろうが、あの神秘的な感じが何とも言えない、それが解らないのかよ」

左隣に居た生徒は

「お前ら何も分かって居ないな」

「「何がだよ」」

「サードの真琴ことマコちゃんだろう。外見は二人には劣るかもしれないけど、それでもそこら辺の女どもと比べたら天と地ほど違うし、ほかの二人と違い家庭的な

雰囲気を醸し出す彼女こそ一番だ」

と、こいつらのコメントを聞いても分かるようにチルドレン一人一人ファンクラブができているらしい、それも世界各国で無数に有るらしい

「馬鹿ばっかりなんだな、アイドルに熱を上げたって無理なものは無理だろうに・・・」

と独り言は吐きながらテレビの電源を切った。

僕はチルドレンの事は大っ嫌いだ、周りでこいつらの話題が出ると僕の機嫌は最低にまで落ち込む。一度この事でクラスメートで

国会議員の父を持ち、綾波レイの非公式ファンクラブ会員ナンバー1桁台（何が凄いのか自慢していたな）の佐々木良平を殴り合いにもなった。理由は僕が言った一言

「あんな奴らの何処が良いんだ」

と言ったら佐々木の右拳が僕の左頬に捩じ込まれていた。それ以来、僕は佐々木だけでなくチルドレンのファンクラブのメンバー、一同からも理不尽な扱いを受けるようになった。

先生達もそれも知っているがファンクラブの連中が怖いのか、見て

見ぬ振りをしているし、先生達の中にもファンの人が居るから仕方が無いのかもしれない。

「・・・理不尽だ、くそっ」

あ～、自己紹介してなかったな、僕の名前は神崎アキラ名字は偽名だか１７歳で第三東京市第一高校二年生だ。母と姉、そして僕とで三人家族だ。僕は母と姉とは血が繋がっていない。

セカンドインパクトの時に本当の親とはぐれて泣いていた僕を拾って守ってくれたのが姉のだった。それ以来、僕は姉の事を姉様と呼ぶようになった。今でも家族関係は良好だ、

特に姉様との関係は良好だ。何度か姉弟でなく恋人同士みたいに見えるって近所の人に言われて嬉しくなった事がある。姉はそんな事を言われると、いつも嬉しそうな顔になるけど

「手のかかる弟なんですけど、私の一番の宝物なんです。」

って、僕にとっては天にも昇るような事を言ってくれる。

なぜ本名でなく偽名の神崎で通しているかって言うと過去何回も誘拐された事があるからだ、母と姉は少しばかり有名人で大変な事が多い、だからこそ家族を守れるように幾つもの格闘術を

学び続け来た。今ならあいつの事も護れる位には成ったと思う。

ふと時計を見ると既に家を出る時間が過ぎていた。色々考えすぎたようだ。

「げっ、もうこんな時間かよ」

僕は慌てて制服に着替えてカバンを持って玄関から元気よく

「いってきます」

誰も居ない家に声を掛け鍵を閉めて登校するのだった。

この日が僕ことアキラの普通の生活の終わりの日だった

苛立ち

『１５年前、人類は南極で初めて使徒と言う未知の生命体を発見・接触しました。そして今だ謎であるセカンドインパクトと言う人類の半数近くを

死に至らしめた災害から人類は復興の道を一歩一歩と進んで今日まで頑張ってきました。ですが５年前に国連から発表された世界には使徒が後１０体も

存在していて５年後に復活しサードインパクトが起こると言う新たな真実に世界は恐怖したのは皆さんの記憶に新しい事でしょう。ですが国連は

秘密裏に創設していた研究機関ゲルヒン（ＧＥＨＩＲＮ）を解体、国際連合直属公開組織　特務機関ネルフ（ＮＥＲＶ）を設立・研究結果を発表しました。

発表の中には使徒に対抗するための兵器「汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン」、そのパイロット、ファーストチルドレン綾波レイ・セカンド

チルドレン惣流・アスカ・ラングレー、２名が居ます。

我々、人類がいや世界が生き残るには、その二つに未来を架けるしか無かったのです。ですが我々人類はそれだけでは諦めませんでした、新たなチルドレンを

パイロットを見つける為に各国にあるネルフ支部で連日行われてる

適正試験、日に世界平均で1日に約5千が受けてました。初めは国家公務員などが受け

その次に大人だけでが受ける権利があり色々な人たちが受けましたが、

しかし結果は0、誰一人としてシンクロできないという結果に人類は落胆しました。

ある時、誰かが「大人が駄目なら子ども達なら行けるんじゃないのか」と発言した事が世界を揺るがしました。この事は直ぐに国連で論議されました。

論議の結果段階的に年齢を落とし未成年は親の承諾書が無ければ試験を受けれないというものとなったのです、これにより昨年、今までファーストと

セカンドの二人しか見つかって居なかった者が世界中から新たに4人も発見する事が出来たのは奇跡としか言えないのでは無いのでしょうか

6人となったチルドレンには我々人類の命運が懸かって居るので是非頑張って欲しいものですね』

「毎日同じようなニュースを放送して何が面白いのかしらね」
といった女は手に持っていた缶ビールを飲み干した。
「仕方が無いんじゃないの。サードインパクトの恐ろしさを刷り込み、また成人もしていない１４歳の子どもが６人もパイロットになってるって言われれば
大人だったらプライドが有るので、子ども達は自分達と近い子達が頑張っている、チルドレンに近付きたいって輩も居る、理由は色々あるだろけどニュース等の
これだけ言われれば誰だって一度は受けようとするでしょ。」
手に持った書類を捲りながら感心が無いように答えた。
「それはそうだけどね・・・」
空き缶を手の中で弄びながら考えが纏らないのか続く言葉が出なかった
「仕方ないでしょ、大人はどんなにしたって乗れない事がこの５年で嫌って程分かっているでしょ。ミサト」
その言葉にミサトはしかめっ面になったが、少し考えてある事を思い出した
「りつこ、あの二人を復帰させたら良いんじゃないの？」

ミサトはさっきと打って変って妙案を考えたと思ってどうだって顔をりつこに向けていた。

「はぁ・・・みさと、貴女はあの二人を復帰させたいの？私達ネルフだけじゃない、汚い大人たちが世界があの二人に何をしたか覚えてるの？

覚えているのなら二人の事は忘れない、良いわね？」

リツコは話を此処で打ち切ると持っていた書類を閉じ机の上に置いた。

諦めきれないのかミサトはリツコの両肩に手を置き

「でも、あの子ならリツコの頼みなら乗ってくれるんじゃないの？確かに二人にしてきた事を考えると許されるとは思わないは、でも、全身全霊で

謝れば如何にかなるかも知れないでしょ、特にあの子、頼んでみてくれないかな。お願い　リツコ」

ミサトはリツコに手を合わせて拝むように頼むのだった

リツコは諦めたか、はぁっとため息一つを吐いて白衣のポケットに中から猫の顔の形を可愛くデフォルトされた携帯電話でメールと打ち始めた。

アキラは今全力で学校に向かって走っている。アキラにとって遅刻なんてどうでも良い事なんだが姉様と学校には遅行・早退・欠席しないと絶対に

卒業すると言ったを約束させられていたので、姉様の泣く姿なんて見たくないと言う理由で頑張っているのだ。

「まずいな、間に合うかどうかギリギリな所だな。姉様が泣く姿なんて見たくないからもう少し死ぬ気で頑張るか」

頑張ったせいか、なんとか正門が閉まる前に飛ぶこむ事が出来、遅刻を回避できた事に安堵した。

チッ

余程悔しかったのか、風紀委員が舌打ちをしていた。よく見てみると綾波ファンクラブのメンバーだった。

「学校に来ても良い事なんて無いんだから来るなよ、屑が」

そお言うと、他に仕事が無かったのか風紀委員達は校舎の中に入って行った。

僕は少し遅れるように校舎に入り自分の靴箱の前で立ち止まった。

靴箱の中には上履きは入っていないが、いつも中を確認するのが１年からの習慣となっていたが

中は何時もの様にゴミなどがギッシリと詰まっていた

「今日は動物の死体は入って居ないのか、ラッキー」

と言ってリュックから上履きの入った袋を出し履き替え下履きを袋に入れリュックにします。あの事件まで普通にしていたが、後では靴が盗られたり切られたりして

買い換えるのもお金が掛かるので少し面倒だかこの様にやっている。

何時も道理に教室に向かうが俺が教室に入ると先程まで騒がしかった教室は一瞬で静かになった、いや声は聞こえてくる、周りを見れば各ファンクラブの面々が集まって

こちらをこそこそを盗み見ながら僕の悪口でも言っているのだろう、これにも慣れたものだを思っていると

『メールだにゃ、メールだにゃ』

と僕の姉様とお揃い携帯を取り出す。こんな時間に何の様なんだろう姉様と思ってメールを見てみる

『今日、重要な話がありますので２０時に私の部屋に来るように』

話？なんだろう？何かしただろうか、いや、この頃は何もしていないはず、１年の学期末の試験結果は良かったから違うしな、なんなんだろうか、とても気になるが

２０時になれば分かるかと思いあまり気にしない事にした。

「おっ、アキラ、今のメールなんだったんだ？お前にメールのやり取りする相手なんて居ないだろうが」

あっ、誰だ？と思ったら嫌味な佐々木良平だった。

「あっ、テメーには関係ないだろうが」

佐々木は僕の受け答えが余程気に食わなかったのか、それとも最初から機嫌が悪かったのか僕の胸倉を掴んできたが今までにも何度もあった事なんで。僕は慌てる事も無く

佐々木を睨み返し手を振り解いてやった。

「お前みたいな奴が居るとクラスの迷惑なんだよう、お前一人チルドレンを嫌ってるだけで他のクラスからどんな風に見られているか分かって居るのか、どうなんだ」

佐々木がクラスの皆の気持を代弁するが如く僕に向かっていきなり吠えた

「お前がチルドレンが嫌いなのは分かっているけどな理由を誰にも言わない、話が出ただけで不機嫌になり、チルドレンやファンクラブの皆の悪口を言う。お前はなんなんだ」

気が付くと部屋に居たクラスメートだけでなく、他のクラスの奴も僕達二人を囲んで見ている

「五月蝿い、お前らには関係ないだろう。チルドレン、チルドレンって毎日毎日言いやがって、それを聞かされる身にもなってみろ」

僕も普段なら言い返さないんだが今朝の夢見が悪かった事もあり、つい言い返してしまった

「チルドレンの皆は俺達より年下の子達だろうが、そんな子達が頑張ってるのを応援して何が悪い」（そうだ、そうだ）

って佐々木の言葉に周りの連中も口を挟みだした。

「サードの氷野真琴ちゃんなんて、喧嘩すらした事無いって話なのに使徒なんて化け物と戦うって言っているんだよ。皆で応援してあげようよ」

委員長の洞木が言った。周りも頷いて同意している。

「知るかよ、あいつらはあれで高い給料貰ってるんだろうが、仕事だろうが、それに応援なんかしなくて適正試験受けろよ、このクラスで何人受けた5人か、１０人か、それとも僕以外の

全員かどれだけ受けたんだよ、答えてみろよ」

何人かは眼を逸らしたが7割近くがこちらをじっと見ている

「ああ、受けたさ、でもな落ちたんだよ、適正無しって言われてな。何人かはまだだけどそれは親が許可しないだけで受けたいって気持

ちはある。お前に分かるか」

佐々木は真剣に僕の顔を見て言ってきた

僕はそれに何も言えずに教室を出ようと出口に向かったが途中、佐々木の横を通り過ぎる時に聞こえるか聞こえないか位の声で

「お前らだって僕の気持なんて何も分からない癖に・・・」

僕はそのまま部屋を出て屋上に一人になりに向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8470l/

依存〈エヴァ〉

2010年10月9日22時34分発行